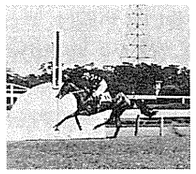
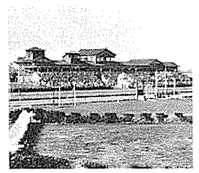


ムカシの競馬を読む



須田鷹雄（すだ たかお）
1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第107回 10年・20年・30年前の4月

いまから10年前、平成16年の4月というと、桜花賞をダンスインザムード、皐月賞をダイワメジャーが制した月。勝ち馬を含めて桜花賞・皐月賞の双方にサンデーサイレンス産駒が8頭ずつ出走しており、まさにSS王朝の感であった。そんな中異彩を放っていたのが皐月賞2着のコスモバルクで、道営所属の外厩馬、しかもサグレブ産駒というのは時代の反逆児とも言えるプロフィールであった。

この月は、一見地味だが重要な出来事のあった月でもある。平成16年4月21日付のデイリースポーツから引用しよう。

「参院農林水産委員会は20日、競馬事業の収益改善を狙いとした競馬法改正案を可決した。21日の参院本会議で採決する」

「改正案には馬券の売り上げ減少に対応するため、複数レースの勝ち馬を同時に当てる重勝式馬券の導入が盛り込まれている」

「また、中央と地方のどちらでも両方の馬券が購入できるよう、馬券の委託販売を認める。学生でも20歳以上なら馬券を購入できるよう制限を緩和する。現在は25％の控除率を、馬券の種類によっては20％まで引き下げる」

この時点では参院を通っただけで衆院に送られる前なのだが、歴史的な第一歩と言えよう。重勝式の復活が現在のWIN5などに繋がっていることはもちろんだが、重要なのは馬券の委託販売。現在はJ-PLACEの名前で地方側が中央の馬券を売ることが普通になったが、これは中央・地方の双方にとってメリットのある提携となっている。

また、IPATによる地方側の馬券発売は地方競馬場の経営に大きく貢献しており、昨年多くの地区が売り上げを伸ばしたことは記憶に新しい。それらの提携の第一歩が、この参院農水委員会での法案可決だった。

続いては一転してヒマネタを。4月8日付のサンスポより。

「兄弟デュオ、狩人が7日、千葉・佐原市の沼田ファームで新曲『夢をのせて』（狩人HPなどで通信販売中）を40人のファンの前で発表。新曲のシンボル・競走馬のアズサエキスプレス（仮）もお披露目された（中略）狩人は夢に向かって頑張る人を応援する同曲のシンボルとして競走馬を購入。自らも賞金獲得の夢に挑戦する。馬は2歳の牡馬で、関係者によると『度胸がある馬。将来が楽しみ』。9月に大井競馬でデビュー予定。正式な馬名は狩人のHPなどで募集する。レースの賞金は経費を除き全額福祉団体などに寄付するという」

「狩人HPなどで通信販売中」

「40人のファン」のあたりにもの哀しさが漂わないでもないが、いずれにしても馬を持ってくれるというのはありがたいことである。

この時期ではアズサエキスプレスという仮の名前がついていたこの馬、最終的にはアズサドリームという馬名になり、川崎の中野五男厩舎に入厩した。デビュー戦は1番人気に支持されたが7着。以降も苦戦したが、4歳秋に川崎で2勝をあげた。このような企画モノの対象馬としてはまずまず走ったほうではないだろうか。

ちなみに狩人はその後解散→再結成している。兄弟仲が良くないようで現在は所属事務所も別々だが、アズサドリームの馬主名義は弟の加藤高道が所属する株式会社夢グループであった。

続いて20年前、平成6年の4月から。4月というと入学式の季節でもあり、競馬学校の入学式もニュースになる。

4月5日のデイリースポーツから引用しよう。

「JRA競馬学校の騎手課程13期生入学式が4日、千葉県白井町の競馬学校で行われた。239人の応募の中から合格した武幸四郎君（武邦彦師四男）や押田純子さん（押田年郎騎手長女）ら女子2人を含む14人は緊張の面持ちで式典に臨み、3年間の学校生活へスタートを切った」

この13期で現役を続けているのは関東が江田勇亮、勝浦正樹、武士沢友治、村田一誠の各騎手。関西は武幸四郎騎手の他に秋山真一郎騎手と松田大作騎手だ。この時点では全員初々しい少年たちなわけだが、20年後に振り返ってみるとやけに通好みなメンバーが揃ったものである。1つ上の代は福永祐一騎手を代表とする「花の12期」と呼ばれているが、こちらはディープな競馬ファン向きの期という趣である。

続いては、本欄でよく取り上げる「当時は話題の血統だった」ネタを20年前から。平成6年4月6日付のサンスポから引用してみよう。

「オグリキャップの初産駒として注目を集めているホッカイドウ競馬のエゾノパワー（母フォチュナ、高岡厩舎）が5日、北海道門別トレーニングセンターで行われた3歳（筆者注：旧表記であり現在の2歳）能力検査に登場、4ハロン51秒6の好タイムをマークして競走馬のパスポートを手にした」

「注目のデビュー戦は5月上旬あたりになりそうで、オグリ2世がどんな走りを見せるか熱い視線を集めそうだ」

中央競馬の2歳戦は当時も今も早くて6月から始まるもの。4月から2歳戦が始まるホッカイドウ競馬において、より早いオグリキャップ産駒の登場を期待する記事である。

しかし、このエゾノパワーはデビューが結局遅れてしまい、オグリキャップ産駒の初出走を成し遂げることはできなかった。オグリ産駒で最初にレースを走ったのはオグリテンジンという馬で、平成6年6月22日に笠松競馬場でデビューした（4着）。

中央で最初にデビューしたオグリキャップ産駒はご記憶の方も多いようにオグリワン号で、平成6年7月14日（4着）。エゾノパワーはそれから遅れること5日の7月19日に旭川競馬場でデビューし2着だった。

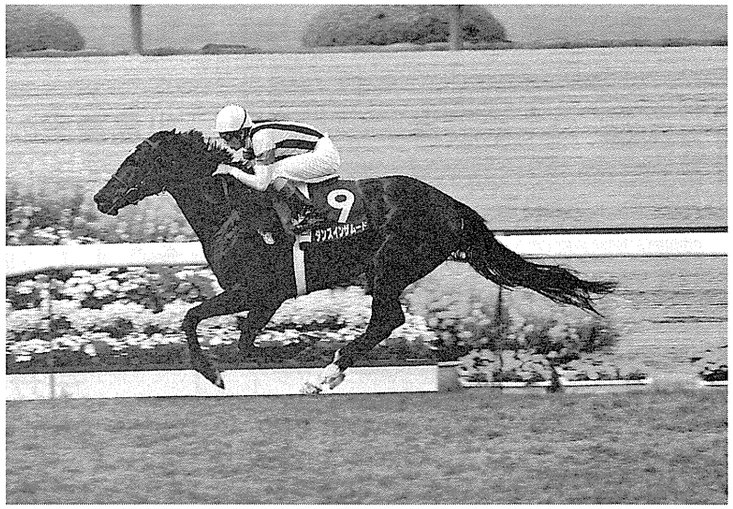
デビュー戦を勝っていれば「オグリキャップ産駒初勝利」は手に入ったのだが、2着だったことでこちらはオグリワン（8月7日初勝利）に譲ることとなった。不運なことに、デビュー戦2着時の勝ち馬は後に帝王賞などを勝つコンサートボーイ。さすがに相手が悪かった。

最後に30年前、昭和59年4月から。これはいまでもあってよい発想、と思われるニュースを4月2日付のデイリーニュースから引用しよう。

「今や世の中、多目的時代。5万坪という広〜い敷地を持つ川崎競馬場内にヘラブナとコイの釣り場が完成、1日からよみうりランド川崎フィッシングセンターとしてオープンした。なにしろ広さでは負けない競馬場。無料駐車何台でもOK、家族連れで遊べる広大な芝生。これまでの釣り堀とひと味違うフィッシングセンターとなりそう。ただし釣りを楽しめるのは競馬非開催日だけ」

私も知らなかったが、いまでは駐車場になっている内馬場の3コーナー側を釣り堀にしていたそうである。現在3号スタンドを取り壊してその跡地にスーパーマーケットやドラッグストアなどの入る商業施設を建てる計画が進行中の川崎競馬場だが、複合施設化のはじまりが昭和の時代に実現していたわけだ。

釣り堀はやがて廃止になったが、競馬場内の遊休スペースを活用する発想は今もあっていいだろう。例えば浦和競馬場や名古屋競馬場あたりは内馬場に貸し菜園でも作れば、それがどれだけの収益をもたらすかは別として、地元の競馬場アレルギーを払拭し、競馬の味方を増やす効果があるはずだ。



平成16年・阪神競馬場
桜花賞
優勝馬：ダンスインザムード

© JRA